

特別活動の経験と効果に関する研究

—大学生の振り返り調査を用いて—

Experiences and Effects of Tokkatsu (Student-Led Activities):

Retrospective Survey of University Students

小 方 直 幸¹

Ogata Naoyuki

要旨

本研究は、大学生を対象とした振り返り調査を用いて、義務教育段階における特別活動の取組状況や経験した内容を踏まえつつ、特別活動の効果とその規定要因の分析を行ったものである。教職課程に在籍する学生を中心とした分析という限界はあるものの、多くが小学校・中学校時代の特別活動に積極的に参加し、またその効果もあったと認識している点や、個人の特別活動への取組状況や実際に経験した学級の特性が、特別活動の効果認識を左右していることが明らかとなった。

キーワード：特別活動、大学生調査、効果認識

1. 研究の目的と先行研究の検討

本稿は、大学生に対する振り返り調査に基づき、小学校、中学校における特別活動教育の運営実態、自身の参加状況、そして当時かつ現在も含む特別活動の効果について、実証的に明らかにすることを目的としている。

特別活動は以前の特別教育活動から名称変更が行われ1968年に創設されて現在に至る。1998年には特別活動に関わる科目が教員職員免許法施行規則により教職課程科目として必修化された。日本の授業研究はレッスン・スタディとして国際化が早くから行われる一方、全人的な教育枠組みである特別活動も「Tokkatsu」として国際的に認知され、助走期を経てテークオフ期を迎えようとしている（恒吉2017）。既に特別活動は、アジアの諸国では盛んに行われ教育課程の中にフォーマルに位置づけられる場合も多く、北欧でも児童会活動を中心に盛んに行われ、北米である程度盛んに取り組まれているが、他の西欧諸国やラテンアメリカ、アフリカ諸国では低調だという（吉田他1993）。

日本で長い歴史があり世界でも展開が進む特別活動であるが、本稿で注目する児童・生徒の視点からのアプローチ

としては、大学生に対する振り返り調査の形で実証したいいくつかの研究がある。

大石（1993）は、小学校では教師の指導が中心で、中学校になると児童生徒中心に移行することを明らかにしている。学級活動・ホームルーム活動の運営は、「児童生徒中心」は小学校（32%）から中学校（39%）にかけて増加し、「教師が中心」は57%から42%に減少し、児童会・生徒会活動も「児童生徒中心」は小学校（27%）から中学校（54%）にかけて増加し、「教師が中心」は52%から24%に減少している。また、心に残っている学校行事の上位3つは、小学校では「運動会（59%）」「修学旅行（57%）」「卒業式（56%）」、中学校では「修学旅行（81%）」「卒業式（54%）」「運動会（59%）」の順である。

林（2012）は、特別活動への参加度から特別活動教育への示唆を探ろうとしたものである。まず参加度は小学校では「遠足・集団宿泊行事」「クラブ活動」「健康安全・体育的行事」が高く、「児童会活動」「課外活動」が低いこと、中学校では「旅行・集団宿泊行事」「文化的行事」「部活動」が高く、「生徒会活動」「話し合い型の学級活動」が低いこ

1 香川大学教育学部

とを明らかにしている。また、児童・生徒会活動は役員等になるか否かも参加度を左右するため、これらでは標準偏差が大きく回答者間のバラツキも大きい。一方、学校段階による参加度には類似性が認められ、小学校の話し合い活動と中学校の話し合い活動、小学校の学級活動の参加度と中学校学級活動の参加度にはそれぞれ高い相関関係がある。学校行事の参加意欲についても同様で、運動会や体育祭などの健康安全・体育的行事、始業式や卒業式などの儀式的行事でも、小学校と中学校における参加意欲には高い相関が確認されている。加えて、小学校においても中学校においても学級委員の経験者では、自ら活動に積極的に参加するという以上に、他の児童生徒を積極的に参加させる役割を担っている点も指摘している。

これに対して上之園・山田（2020）は、学級活動・ホームルーム活動に焦点をあて、実施状況や諸問題の解決状況の振り返り調査を行っている。小学校に関しては活動も課題解決も実施の記憶が7-8割と高いものの、中学校については何れも十分に想起できない結果になっている点を指摘している。同様の結果は学級内の組織づくりや仕事の分担状況についても得られている。また効果に関わるものとして多様な集団の生活向上に対しては、小学校では過半数が肯定的に回答しているが中学校では過半数に満たず、またどちらともいえないと判断を保留する回答が多い。

学習指導要領は特別活動の目標として、（1）多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする、（2）集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする、（3）自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う、の3点を掲げている。だが大石（前掲）も林（前掲）も、大学生に対する振り返り調査により特別活動の運営実態や参加状況に関しては明らかにしているが、小中学校時代の特別活動の効果や、その後の影響について検討しているわけではない。上之園・山田（前掲）でも部分的な扱いに留まっている。この点について山田（2003）は、統計的手法に基づいて大規模な調査を実施しても、特別活動の有効性を普遍的に提示し実証することは難しいと述べている。その理由として、特別活動の有効性を規定する要因が多いことに加え、それぞれの要因が複雑に作用し合っていること、子どもを取り巻く環境の変化が大きく、1時点の調査結果が将来も該当する保証はないこと、の2点を挙げている。

今回取り上げた先行研究は、何れも学校段階別に特別活動の経験を振り返った調査だが、小学校では6種類の、中学校でも3種類の学級を経験しており、小学校、中学校時

代を一般化して回答することの困難性も、量的調査のハードルになっている。実際、どちらともいえないという回答が少なくない背景には、振り返って評価すること自体の難しさに加え、異なる学級体験があり必ずしも一貫した経験が得られていない可能性を否定できない。他方で、特定の学年を想起してもらい回答を求める手もあるが、回答者への負荷が大きだけでなく、特定の学年の記憶がどこまで明確にあるかという課題も残る。以上の諸課題を前提とした上で、先行研究の到達点も踏まえ、特に不十分であった効果に関する設問を厚くすることで、本稿では大学生による振り返り調査を半歩前進させることを目指す。なお先行研究では高校までを含めて考察しているが、今回は小学校と中学校に絞って振り返ってもらった。

2. 調査の概要と回答者の属性

調査は2022年の11月に教育学部の3つの授業の受講者に対してWeb上で行った。回収数は188であった。何れも全ての設問に回答済みであり、以下ではこの188票の回答を用いる。3つの授業の総登録受講者数を母数とした場合の回収率は48%だが、複数の授業を重複履修する者もあり、正確な回収率は算出できない。

表1 回答者の属性

	（%）			
学年	1年	2年	3・4年	
	33.0	54.3	12.8	
学部	（%）			
	教育学部	その他		
	89.4	10.6		
出身	（%）			
	香川県	その他	両方	
	45.2	53.2	1.6	
教職志望	（%）			
	教職	教職以外	未定	
	50.5	19.7	29.8	
特活論受講	（%）			
	ある	ない		
	58.5	41.5		
中3成績	（%）			
	下	中の下	中の上	上
	1.6	5.3	31.4	61.7

回答者の属性を表1に示した。学年は2年生が過半数を占め、1年生が33%、3・4年生が13%、所属学部は教育学部が89%と多数を占め、出身は香川県と香川県以外がほぼ半数ずつである。回答時点における教職志望は、教職志望が51%、教職以外が20%、未定が30%となっている。ま

た科目「特別活動論」の受講の有無については59%が経験ありである。中学3年時点での成績についても尋ねており、上の方が62%と多く、次いで中の上の31%となっている。

3. 特別活動への取組状況

まずは小中学校時代の特別活動への取組状況から検討する(表2)。質問票では「全く取り組まなかった」「あまり取り組まなかった」「ある程度取り組んだ」「とても取り組んだ」「どちらもあり判断が難しい」の5つから選択してもらっており、表中には「ある程度取り組んだ」「とても取り組んだ」という肯定的な回答を挙げている。

表2 特別活動の取組状況

	(%)	
	ある程度	とても
小学校で		
始業式や卒業式	52.7	25.5
学芸会・文化祭等の行事	43.1	45.7
運動会・体育祭等の行事	31.4	61.7
修学旅行や宿泊行事	20.2	75.0
ボランティア等の社会奉仕活動	49.5	13.3
学級・ホームルーム活動	55.3	23.9
児童・生徒会活動	36.2	29.3
クラブ・部活動	36.7	52.1
中学校で	ある程度	とても
始業式や卒業式	49.5	19.7
学芸会・文化祭等の行事	34.6	58.0
運動会・体育祭等の行事	30.3	60.6
修学旅行や宿泊行事	24.5	70.7
ボランティア等の社会奉仕活動	45.7	15.4
学級・ホームルーム活動	53.2	23.4
児童・生徒会活動	22.3	21.3
クラブ・部活動	21.8	64.4

まず、回答の多くが教育学部生という背景もあるかもしれないが、肯定的な評価の割合が高い。最も熱心に取り組んだのは修学旅行や宿泊行事であり、小中ともに「とても取り組んだ」の割合が7割を超えている。次いで運動会・体育祭等の体育的行事、そして学芸会・文化祭等の行事、クラブ・部活動となっている。これら3つはほぼ9割が熱心に取り組んだと回答している。なお中学校の部活動は特別活動以外の活動として回答してもらっている。一方、相対的に熱心度が低かったのはボランティア等の社会奉仕活動や児童・生徒会活動である。ただし社会奉仕活動については今回の設問では経験の頻度等は確認できていない。そもそも経験自体が多くなかった可能性への留意も必要である。

また当然のことながら、学級・ホームルーム活動や児童・生徒会活動は、学級委員の経験や児童・生徒会執行部の経験の有無にも影響を受ける。学級委員の経験者と未経験者では学級・ホームルーム活動の熱心度(「ある程度取り組んだ」+「とても取り組んだ」)に小学校では18ポイント、中学校では統計的に有意ではないが8ポイントの差がある。また児童・生徒会執行部の経験者と未経験者では児童・生徒会活動の熱心度に小学校で46ポイント、中学校で63ポイントの差があり、経験の有無の影響は児童・生徒会活動でより顕著である。

4. 学級・ホームルーム活動や児童・生徒会活動の運営状況

続いて小中学校時代に経験した学級・ホームルーム活動や児童・生徒会活動の運営の状況である。

表3 学級・ホームルーム活動の運営状況

	(%)
小学校で	
児童・生徒中心の運営が多かった	23.9
教師の指導が中心の運営が多かった	62.2
どちらも経験したので判断が難しい	13.8
中学校で	
児童・生徒中心の運営が多かった	43.6
教師の指導が中心の運営が多かった	35.1
どちらも経験したので判断が難しい	21.3

表3から、小学校から中学校に移行するにつれ、教師中心から児童・生徒中心になっており、大石(前掲)と整合的な結果が得られた。小学校では62%が教師中心の運営と回答しているのに対して、中学校ではその割合が35%へと減少する。小学校の場合、特に低学年では教師指導が中心になりがちであり、学年による相違や変化もあると想定される。一方で、中学校においても1/3は教師主導の運営となっている。なおどちらも経験したので判断が難しいという回答も、小学校で14%、中学校で21%とある。小学校の場合は学年による相違を反映した回答も含まれると考えられるが、同じ学校に在籍していても、学級担任の方針等でも学級・ホームルーム活動の基本的な運営のあり方が変わること示す結果である。

学習指導要領解説で小学校は「学校全体の生活を共に楽しく豊かにするために学校の全児童をもって組織する異年齢集団の児童会による自発的、自治的な活動」、中学校も「学校における自分たちの生活の充実・発展や学校生活の改善・向上を目指すために、生徒の立場から自発的、自治的に行われる活動」とあるように、児童・生徒会活動はより児童・生徒中心の運営になることが求められるが、実態はどうか(表4)。どちらも経験したという回答も一定割

表4 児童・生徒会活動の運営状況

	(%)
小学校で	
児童・生徒中心の運営が多かった	21.8
教師の指導が中心の運営が多かった	48.4
どちらも経験したので判断が難しい	14.9
わからない	14.9
中学校で	
児童・生徒中心の運営が多かった	18.6
教師の指導が中心の運営が多かった	53.2
どちらも経験したので判断が難しい	14.4
わからない	13.8

合あることへの留意は必要だが、学習指導要領の記載や予想に反して、児童・生徒中心の運営が多かったとの回答は2割と低調であった。小学校で22%、中学校でも19%しか選択していない。この点は大石（前掲）とは異なる結果となった。

表5 児童・生徒会活動の活発度

	(%)	
	小学校	中学校
思わない	4.3	2.7
あまり思わない	26.1	16.5
ある程度思う	48.4	45.2
思う	16.0	27.7
わからない	5.3	8.0

活動の活発度についてはどうか（表5）。小学校では64%、中学校では73%が肯定的な評価をしているものの、「思う」と積極的に回答したのは小学校で16%、中学校でも28%にとどまった。なお児童・生徒会活動の活発度は、自身が役員等に関わってなくても判断できる場合もあるが、役員等の関わりが判断に影響する点も無視できない。質問票では、児童会・生徒会執行部の経験の有無についても尋ねており、その影響があるか否かについても検討した（表6）。まず執行部経験者ではわからないという回答が明らかに減っている。ただし結論から述べると、一概にはいえないという結果が得られた。小学校では確かに児童会執行部経験者は児童・生徒中心と考える傾向にあるが、中学校の場合はむしろ逆の傾向にあるからである。なお、活発度の認識に対しては、執行部経験の有無が明確な影響を及ぼしている（表7）。活動が活発だったと思う比率が、経験者と未経験者の間で小学校では19ポイント、中学校では35ポイント異なる¹⁾。

表6 児童・生徒会執行部の経験の有無と運営の捉え方

	(%)	
	経験なし	経験あり
小学校で**		
児童・生徒中心の運営が多かった	18.5	29.3
教師の指導が中心の運営が多かった	49.2	46.6
どちらも経験したので判断が難しい	12.3	20.7
わからない	20.0	3.4
中学校で**		
児童・生徒中心の運営が多かった	21.1	8.3
教師の指導が中心の運営が多かった	50.0	66.7
どちらも経験したので判断が難しい	11.8	25.0
わからない	17.1	0.0

* 5%、** 1%、*** 0.1%で有意

表7 児童・生徒会執行部の経験の有無と活発度の捉え方

	(%)	
	経験なし	経験あり
小学校で**		
思わない	5.4	1.7
あまり思わない	30.8	15.5
ある程度思う	46.9	51.7
思う	10.0	29.3
わからない	6.9	1.7
中学校で***		
思わない	3.3	0.0
あまり思わない	19.1	5.6
ある程度思う	46.7	38.9
思う	21.1	55.6
わからない	9.9	0.0

* 5%、** 1%、*** 0.1%で有意

5. 特別活動の経験の効果

質問票では特別活動の効果について、①小学校時代の経験と在学中の役立ち度、②中学校時代の経験と在学中の役立ち度、③小中学校時代の経験と現在の役立ち度、の3点で尋ねている。まずはそれぞれの回答傾向から確認する。表8は小学校および中学校在学中の経験と評価の関係を検討したものである。何れも6割以上が在学中に効果があったと回答している。中でも評価が高かったのは、小学校でも中学校でも「集団の一員としての自覚や振る舞い」「望ましい友達・友人関係」であり、これら2つでは肯定的な評価が8割を超えている。なお「進路や将来のキャリア」に対する評価は、中学校では75%が肯定的に回答しているが、小学校では61%にとどまる。ただこの結果を、例えば小学校におけるキャリア教育が不十分であるという結論に一概に結びつけることは危険である。中学校になると高校進学もあり将来のキャリアをより考える機会に恵まれる

が、小学校ではその限りではないからである。

表8 小中学校時代の経験と在学中の効果

	(%)	
小学校の経験	ある程度	とても
集団の一員としての自覚や振る舞い	66.5	17.0
望ましい友達・友人関係	58.5	26.1
基本的な生活習慣	59.6	14.4
健康で安全な過ごし方	64.4	15.4
進路や将来のキャリア	53.2	7.4
中学校の経験	ある程度	とても
集団の一員としての自覚や振る舞い	59.0	29.3
望ましい友達・友人関係	57.4	29.8
基本的な生活習慣	57.4	14.4
健康で安全な過ごし方	64.9	14.9
進路や将来のキャリア	53.2	21.8

こうした在学中の効果感は、現在即ち大学生として振り返った際にも持続しているのだろうか。小中学校時代に経験した特別活動（部活動は除く）は現在でも役立っていると思うか、という問いに対する回答は以下であった。「全く役立っていない」2%、「あまり役立っていない」26%、「ある程度役立っている」34%、「とても役立っている」15%、「わからない」23%。時間を経ているため「わからない」という回答が5人に1人に上ることもある程度理解できる結果だが、49%とほぼ半数は現在でも役立っていると回答し、否定的な回答の28%を上回っている。小中学校時の特別活動の経験は、ある程度中長期的な効果を持つと考えて良い。

6. 特別活動の経験の効果認識の規定要因

前節でみた小学校時代、中学校時代、そして現在からみた特別活動の効果について、その規定要因にまで踏み込んだ考察を最後に行っておきたい。

小学校時代、中学校時代の効果（表9・10）に関しては、従属変数は役立ち度を5つの事項について尋ねた合成変数（最低5～最高20）、独立変数は①5つの特別活動に関する8つの事項の熱心度を合成した変数（中学校に関しては部活動も含む8つの事項の熱心度の合成変数²⁾、②学級の状況の合成変数（「相互に認めあえる学級が多かった」「規律が守られる学級が多かった」「活気に満ちた学級が多かった」で最低1～最高3）、③学級委員の経験、④児童・生徒会執行部の経験、⑤学校規模、⑥学力をみるための変数である中3時代の成績、⑦性別（女性を基準とするダミー変数）、⑧教員志望の有無、⑨特別活動論の授業経験の有無の9変数とし、重回帰分析を行った（表中の数値は標準偏回帰係数）。

分析結果の考察に移る前に、学級委員、児童生徒会の執行部の経験および学級の状況の変数について補足しておく。まず経験した学級の状況である。小学校においては、3つのうち何れも経験なし5%、何れか1つ経験54%、何れか2つ経験25%、全て経験17%、中学校においては、3つのうち何れも経験なし9%、何れか1つ経験60%、何れか2つ経験14%、全て経験17%という分布である。次に、学級委員の経験者は小学校が59%、中学校が62%、児童・生徒会活動の経験者は小学校が31%、中学校が19%で、何れも経験なし19%、何れか1つ経験20%、何れか2つ経験39%、何れか3つ経験18%、4つ全てを経験5%という分布になっている。

小中学校を問わず、在学中における効果を規定していたのは、特別活動に対する自身の熱心度ならびに学級の状況の2つの変数であった。自ら熱心に取り組みそして望ましい学級の状況を経験できたことが、在学中の特別活動に対する効果観を高めている。標準偏回帰係数の値に着目すると、熱心度の影響の方が学級の状況の影響よりも大きい。また学級の状況は小学校での効果感により影響を及ぼしている。一方、その他の変数の影響はほとんど認められなかったが、いくつか補足しておく。まず「集団の一員としての自覚や振る舞い」に対する効果は、男性で効果を低く評価する傾向にある。また小学校の「健康で安全な過ごし方」、中学校の「基本的な生活習慣」に対する効果感に対して、それぞれ特別活動論の授業経験が負の影響を及ぼしている。何らかの授業内容等の影響も想定されるが、その理由までを推定することは困難である。

現在における役立ち度については、従属変数は役立ち度を尋ねた変数、独立変数は①熱心度、②学級の状況、③学級委員の経験、④児童・生徒会執行部の経験、⑤学校規模の5つの変数については小学校、中学校それぞれの変数を投入した合計14変数とし、こちらも重回帰分析を行った（表11）。

表から明らかのように、統計的に有意な変数はほとんど確認できなかった。有意な影響があったのは性別と特別活動論の授業経験で、男性では効果に対する評価が低くなる傾向、特別活動論の授業経験は効果に対する評価を高める傾向にある。

小中学校時代に経験した様々な活動が特別活動だったということ、特別活動論の授業で初めて気づく大学生も少なくない。授業を通じて特別活動の狙いを知り、改めて自身の過去を振り返ることで、その意義について再認識した結果と考えられる。

7. 結論

これまでの考察を以下の3点としてまとめておきたい。

第1に、学芸会・文化祭、運動会・体育祭や修学旅行・宿泊行事等のいわゆる学校行事に分類される活動は、頻繁

表9 小学校での特別活動の経験と在学中の評価の規定要因

	集団一員	人間関係	生活習慣	健康安全	進路将来
小学校での熱心度	0.403 ***	0.365 ***	0.191 *	0.226 **	0.346 ***
小学校の学級状況	0.193 **	0.206 **	0.160 *	0.242 **	0.153 *
学級委員の経験	-0.067	0.001	-0.064	0.010	-0.103
児童会執行部の経験	0.029	-0.051	0.001	-0.056	0.006
学校規模	-0.087	0.081	0.025	-0.067	-0.033
中3成績	0.068	-0.009	0.015	0.039	-0.027
性別（男性）	-0.136 *	-0.012	-0.081	-0.085	-0.101
教員志望	-0.009	-0.064	-0.112	-0.103	0.121
特活授業経験	0.056	0.069	-0.111	-0.150 *	0.037
調整済R2乗	0.241	0.171	0.061	0.146	0.182
F値	7.598 ***	5.296 ***	1.190 *	4.550 ***	5.612 ***

* 5%、** 1%、***0.1%で有意

表10 中学校での特別活動の経験と在学中の評価の規定要因

	集団一員	人間関係	生活習慣	健康安全	進路将来
中学校での熱心度	0.278 ***	0.307 ***	0.301 ***	0.202 *	0.241 **
中学校の学級状況	0.221 **	0.141	0.160 *	0.137	0.155 *
学級委員の経験	0.154 *	0.025	0.022	0.062	0.009
生徒会執行部の経験	0.041	0.005	0.043	0.021	0.127
学校規模	0.101	-0.016	0.111	0.061	0.098
中3成績	0.043	0.023	-0.035	-0.020	0.015
性別（男性）	-0.130 *	0.016	-0.059	-0.031	-0.124
教員志望	-0.075	-0.042	-0.087	-0.034	0.124
特活授業経験	0.023	-0.036	-0.152 *	-0.141	-0.027
調整済R2乗	0.196	0.099	0.162	0.074	0.156
F値	6.054 ***	3.288 **	5.025 ***	2.649 **	4.842 ***

* 5%、** 1%、***0.1%で有意

表11 小中学校での特別活動の経験と現在の評価の規定要因

小学校での熱心度	0.111
中学校での熱心度	0.163
小学校の学級状況	0.149
中学校の学級状況	-0.002
学級委員の経験（小学校）	0.111
学級委員の経験（中学校）	0.017
児童会執行部の経験（小学校）	-0.044
生徒会執行部の経験（中学校）	0.103
学校規模（小学校）	-0.044
学校規模（中学校）	0.111
中3成績	0.095
性別（男性）	-0.195 **
教員志望	0.087
特活授業経験	0.189 **
調整済R2乗	0.200
F値	4.342 ***

* 5%、** 1%、***0.1%で有意

に実施されているわけではないこともあり、大学生にとっても記憶に残る経験であり、かつ熱心に取り組んだ活動ともなっている。逆に学級・ホームルーム活動や児童・生徒活動は実際に学級委員や児童・生徒会執行部の経験があるか否か等でも熱心度が大きく左右される活動であり、特に児童・生徒会活動でその傾向が顕著であった。

第2に、学級・ホームルーム活動やとりわけ児童・生徒会活動は、学習指導要領上も児童・生徒中心の運営を求められているが、小学校においても中学校においては、教師の指導が中心の運営が多かったと振り返る者が多数であった。児童・生徒会活動は、放任しておけば自立的な活動に至るというわけではなく、児童・生徒中心の運営を実現する上でも教師の役割は少なくない。だが教師にとっても限られた業務時間の中で学級・ホームルーム活動や児童・生徒会活動を回そうとすれば、どうしても教師中心とならざるを得ない面もあるのかもしれない。この辺りは、教師の働き方とも関わっている課題であり、一概に調査結果だけをみて課題視すべきものではない。

第3に、小学校時代の特別活動の経験は小学生としての生活を送る上で、中学校時代の特別活動の経験は中学生としての生活を送る上で、重要な役割を果たしていることが確認された。大学生による振り返り調査という限界もあり、「とても役立った」への回答は必ずしも多くないが、肯定的に評価する者が多かった。またそうした効果の認識を左右していたのは、まずは自身の特別活動への取組自体であり、次いで経験した学級の状況が望ましいものであったかどうかであった。その意味では振り返り調査とはいえ、回答者の経験に裏付けられた効果感が析出されたといえる。なお、大学生になった現在も特別活動の効果がある程度継続しているという結果も得られたが、その認識は特別活動論の授業経験が左右していた。この結果を授業経験によるバイアスと理解することも可能だが、だからこそ免許取得の必修科目になっているということも可能である。

残された課題もある。まずは調査対象である。大学生といってもほとんどは教育学部の学生、またそうでない場合も教職免許をとろうとしている学生の回答に基づく考察であり、大学生一般に該当するとはいえない。あくまで教職に何らかの関心がある者による評価で、肯定的な評価に偏っている可能性も否定できない。次に調査時期である。本調査はあくまで振り返りの調査に過ぎない。小中学校の特別活動の取組や効果は、限定的に実施される学校行事の場合には妥当性も相対的に高いかもしれないが、日常的な取組や効果を掬い取るには限界もまた大きい。仮に振り返り調査であっても、今回は量的調査に依拠したが特定の事例を挙げてもらい、その丁寧な分析・考察から特別活動の実態や効果を丹念に紐解く作業や、直接児童生徒を対象とした調査研究も必要である。

注：

- (1) 学級・ホームルーム活動の運営方法と学級委員の経験の間には統計的に有意な関係は確認されなかった。
- (2) 「全く取り組まなかった」1、「あまり取り組まなかった」2、「どちらもあり判断が難しい」3、「ある程度取り組んだ」4、「とても取り組んだ」5として合計した値。最低8～最高40。
- (3) 「全く役立っていない」1、「あまり役立っていない」2、「わからない」3、「ある程度役立っている」4、「とても役立っている」5として合計した値。

参考・引用文献：

- 上之園公子・山田恵次（2020）「特別活動に関する大学生の意識調査－「学級活動」「ホームルーム活動」の学習経験に焦点を当てて－」『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』6、223-230。
- 大石勝男（1993）「大学生の回想による特別活動の実態と問題点－調査結果の報告メモ（その1）－」『日本特別活動学会紀要』2、16-23。
- 林尚示（2012）「小学校から高等学校までの特別活動の内容別参加度－学生対象質問紙調査による比較－」『日本特別活動学会紀要』20、49-58。
- 恒吉遼子（2017）「Tokkatsuの国際化」『日本特別活動学会紀要』25、19-21。
- 山田順子（2003）「小学校から高等学校までの特別活動の内容別参加度－学生対象質問紙調査による比較－」『日本特別活動学会紀要』11、13-22。
- 吉田正晴・二宮皓・福井智・猪崎誠也・藤井貴道・佐々木司・渡辺雅弘・石田憲一（1993）「「特別活動」に関する国際調査」『比較教育学研究』19、113-211。